

司祭団から

新しい自分に

生まれ変わる喜び

主任司祭 松本 勝男

私が洗礼を受けたのは、高校三年生の春の復活徹夜祭でした。小学四年生のクリスマスに初めて母に連れられてミサに与つてから、七年余りの月日が流れていました。

後に母は「なぜあの頃、私は息子を信者にしようと思っただけ燃えることができたのか」と述懐していましたが、最初は半ば強制的に教会に連れていかれて、私はだいたい母に反抗しました。しかし、教会に行くとおもしろいご馳走をたくさんいただくことができたし、教会の人たちも皆優しい人たちばかりだったので、文句を言いながらも、年に数回は教会に通っていたように思います。

そんな私が、定期的に教会に通うきっかけとなったのは、高校時代の受験勉強の躓きでした。私が高二の春、折りしも地元の教会に日本人の若い司祭が赴任してこられました。学校勤めの経験があるということでも、かつて私が勤めていた長崎南山学園です。早速母は神父様に私の勉強を世話してほしいと頼み込んだわけです。

土曜日の午後に教会に通い、神父様には主に英語を見てもらいましたが、英語を学ぶならキリスト教のことも知っておいた方が良くだろうということで、一般のテキストの他に聖書も英語で読むことになりました。受験勉強の厳しさに「砂をかむような味気無さ」を感じ始めていた私にとって、聖書の訳読を通して神父様から教えていただいたイエス・キリストの献身的な生き方はとても励みになりました。また、勉強後のコーヒータイムも寛げるひと時で、土曜日に教会に通うのが楽しみになりました。私にとって、教会はまさに「オアシス」となり、自分から洗礼を受けたいという気持ちになりました。

このように私が自ら進んで教会に通うようになった過程を振り返ると、神様の計らいを思わずにはいられません。復活徹夜祭の洗礼は、他の時期の洗礼以上に、新しい自分に生まれ変わる喜びをより深く味わうことができましたが、私にとって、洗礼に至るまでの過程においても、新しい自分に生まれ変わる喜びがありましたし、また、その後の人生においても、その喜びはより豊かなものになっていきました。

洗礼は信仰生活の通過点です。私にとっては、大学受験という壁が信仰に出会うきっかけとなりました。その出会いのおかげで、漠然としていた教師の夢も徐々に明確なものとなり、司祭として生徒に関わる教師を目指して頑張ることができたのです。新しい自分に生まれ変わる喜びは、生涯をかけて育んでいくものではないでしょうか。

「平和があるように」

ネルソン
音流村・バルバロナ

「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなた方を遣わす。」

(ヨハネ20:21)

主イエス・キリストは復活されました！今日、私たちは、主が私たちを罪の重荷から解放されたことを思い起こしています。神は私たちを生き返らせて、復活されたイエスと共に、生まれ変わった人生を祝うことを望んでおられるのです。この復活節のために最も重要なことの一つは、神が全世界に、永続的な平和をもたらし、下さることを希望しながら、復活を記念することです。そして、イエスが宣言されたように、「平和があなた方にありますように」と告げ、私たちも平和の挨拶を他の人々に広げるようにと招かれています。それゆえ、苦難と苦し

みにもかかわらず、キリスト教の信仰を持ちつつ、勇気と自信を持って、イエスの足跡に従って歩んで行きましょう。また、私たちは、友情と兄弟愛を通して、対立するあらゆる心、考え、意見を一つにまとめることが出来るように願いながら、復活の喜びを共に分かち合います。

一方、すべての人の協力や理解なしには、平和を達成できないことを思い出し、平和を達成するためには、共通の目標を持ち、心一つにしなければなりません。すなわち、イエス・キリストを信じている人類全体と一致するために、愛、希望、そして慈善のこころを、神様に求めなければなりません。

そうすれば、聖霊の力によって、復活された救い主イエスの招きに応えることが出来るようになります。それは、ヨハネによる福音で、「誰の罪でも、あなた方が赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなた方が赦さなければ、赦さなのまま残る。(ヨハネ20章23節)」と書いてある通りです。そのため、イエスがトマスに、「見ないのに信じる人は幸いです

ある」と言われたことは、トマスに言われただけでなく、一人の例外もなく私達自身にも言われたことを忘れないようにしましょう。正直に言えば、私たちは、トマスと同じことを考えたり、同じように混乱したりしたことがあるのではないのでしょうか。

最後に、私たちがイエスの復活を祝う時、私たちに溢れているこの喜びを、孤獨な人たちに、自分の人生に光を求めている人たちに、また、まだ暗闇の中にいる人々に告げ知らせ、その喜びを分かち合いましょう。同じように、私たちは、失われた羊のような人々をキリストの元に集め、キリストの光と憐れみのうちに、イエスの兄弟姉妹になることができるようにと祈り続けましょう。霊的に言えば、私たちの心の中で働いているのは私達自身ではありません。使徒パウロは、「わたしは、キリストと共に十字架につけられています。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」と述べています。私たちが同じことを述べる事ができます。

「復活された

イエスが見せたもの」

トウ・ダン・フック

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、…イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言つて、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ」

(ヨハネ21:19-20)

福音書の中で、復活されたイエスは数回にわたつて婦人らと弟子たちに現れしました。毎回現れる度に、重ねて口にしたことばは「あなたがたに平和があるように」であり、また、繰り返して取つた行動は「手とわき腹とお見せになった」ことでした。これらの繰り返したものは、いったいイエスにとつてどれほど重要だったのでしょうか。

まず、復活されたイエスを突然見た弟

子たちはどれほど緊張したかを想像することができると思えます。弟子の一人であつたユダはイエスを売つてしまいました。使徒の頭であつたペトロはイエスのことを三回も否定してしまいました。弟子たち自身も信頼を失い、それぞれの場に散つていきました。もし、最も愛する者たちから裏切られ、何らかの形で乗り越えられたわたしたち自身でしたら、再会の時に、今まで信頼していた人たちに對して何と言うでしょうか。苦情を言い、非常に怒るに決まつているではありませんか。優しい人であつても、説明や理由を求めることは自然です。ペトロや弟子たちは、イエスを見て嬉しく感じると同時に、瞬時にイエスの怒りを待つていたかもしれません。しかし、福音の記述によると、復活されたイエスは、弟子たちのあやまちを過去のものにし、彼らの罪をもう忘れたかのようなのです。苦情を言つたり説明を求めたりするよりも、むしろイエスは、ただ「あなたがたに平和があるように」ということばをもつて弟子たちを安心させたからです。

次に、なぜイエスは繰り返し、弟子たちに手とわき腹とを見せたのでしょうか。逆に言えば、たとえイエスが弟子たちの前に立つていても、手足やわき腹の傷を見せなかつたら、弟子たちは本当にイエスだとは思わず、イエスを他の人間と勘違いしたかもしれません。しかし、傷を見せたことで、間違いなく弟子たちの前に立つているご自身と十字架につけられた者は同じ人物だと弟子たちに証明することができました。さらに、その傷ができた理由はないわけではありませんでした。言い換えれば、その傷は弟子たちをはじめ、人間の罪を背負つてきたのです。つまり、キリスト者にとつてそれらの傷は聖なるものであり、人間に對するいつくしみ深いしとなつてい

人間のあやまちを背負つて傷つけられ、復活された主イエスよ、あなたに對する信仰の喜びを実感させてください。

復活の信仰を

今、ここに生きる

後藤 文雄

初代教会の信仰宣言は、「イエスはキリストである。」であった。これは、イエスの復活を体験した使徒たちと弟子の確信であった。自分たちと三年間寝食を共にし、十字架の苦難の後、死して復活されたイエスが、生きてともにおられることを人々に伝えるところから、福音宣教が始まった。同時に生きた典礼の中でパンをさく式といわれた聖体祭儀が信徒を力づけた。それは復活の宴そのものである。

パレスチナの地からローマの世界へ、そして全世界にひろがっていった。

この復活信仰は、宇宙を含む世界の中で特に「天」と「地」の中で躍動している。

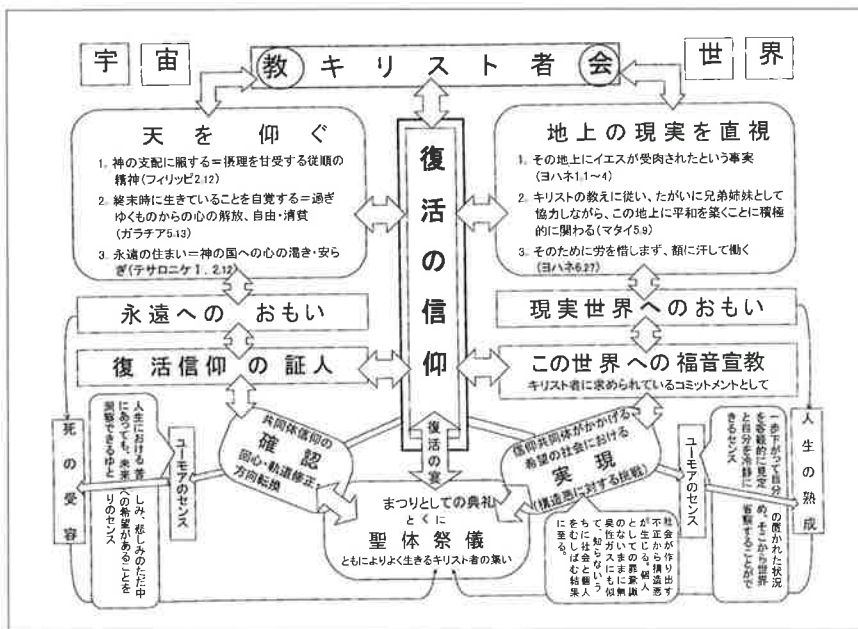
これらのことを下記の図表にまとめてみた。

教会を構成するキリスト者は誰でも片や天をおおぎ、片や地上の現実を直視する。双方とも教会が今日まで大切にしてきたことである。

過去はすぎ去った。未来は未だ来ていない。現在だけが永遠の入口が足元にあることを指し示す。現在の世界情勢が不安定であり、権力者がわがもの顔をしていても、不正がはびこり、弱い立場にある人がしいたげられていたとしても、この状態がいつまでも続くわけではない。

キリスト者は、そうした中にあつても「復活の信仰」に支えられながら天を仰ぎ、地上の現実を直視するなら、自ずとその道が示される。

この関わりの中でいずれの視野にあつても、「ユーモアのセンス」に目を留めていただきたい。このセンスが復活の信仰をもつものの象徴となると私は確信している。



吉祥寺教会 転入神父様のご紹介

この春から2名の神父様を吉祥寺教会にお迎えすることになりました。
お二人のプロフィール等を以下のとおりご紹介いたします。

石脇 秀俊神父様のプロフィール

氏名：石脇 秀俊（いしわき ひでとし）
誕生日：1966年4月3日
出身地：大阪府大阪市
趣味：いろんな資格を取ることに。



経歴：1999年12月18日に名古屋の南山教会にて司祭叙階。初任命として2000年4月1日から2002年3月末まで西町教会で助任司祭として小教区・小学校・幼稚園で務める。2002年4月1日から管区会計および法人事務局長に任命され、2006年3月31日をもって管区会計及び法人事務局長を退任。その間、兼任として2005年7月15日付けで押切教会主任司祭および弥富教会管理者に任命され2010年3月末まで務める。2010年4月1日より2013年3月まで学校法人森ノ宮医療専門学校鍼灸学科を卒業し、はり師・きゅう師免許を取得。2014年4月1日より2018年3月末まで東海教会の主任司祭を務める。

皆様へ一言：これから吉祥寺教会でお世話になることとなりました。東京教区のことや吉祥寺教会のことなど信徒の皆様いろいろなことを教えていただきながら、主任神父様のもとで微力ではありますが、皆様のお役に立てればと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

ロベルト・ソリス神父様のプロフィール

氏名：ロベルト・ソリス
誕生日：1983年9月18日
出身地：フィリピン ボホール島



はじめまして。ロベルト・ソリスと申します。フィリピンから参りました。1983年に、フィリピンの南に位置するボホール島で生まれました。ボホールは、信者がとても熱心でカトリックとしてフィリピンとよく言われます。その上、全ての家族に司祭がいると言われるぐらい司祭が多いです。

子供の時、母の指導で神様のことを知り、故郷の教会で侍者を務めながら、教会の宣教活動を学びました。そこで教会の宣教活動に興味を持つようになりました。高校を卒業してから、2000年に神言会に入会し、2015年に叙階しました。そして、2016年の7月7日に来日して、その翌年、秋田教会に派遣されました。初めて派遣された秋田教会で様々な体験をさせていただきました。その宣教活動の中で神様の働きや導きを感じ、私のほうが宣教されたということが心に残っています。吉祥寺教会でも神様の働きや導きを感じながら皆さんと一緒にがんばっていきたく思います。どうぞよろしく願いいたします。

聖霊の息吹

韓国からこんにちは①

わたしを ちよつと脇に

聖霊奉侍布教修道女会

町村 治美

御復活おめでとうございます。主の平和と喜びがいつも皆様と共にありますように。早くも韓国に派遣されてから一か月以上が過ぎました。正月のお雑煮や夕イ焼きなど食文化や生活がよく似ている韓国と日本ですけれども、やはり話す言葉が違うので、新たな発見や立ち止まって考えさせられることもしばしばです。また初心忘れべからずとはよく言ったもので、入学式で「はい」と返事をした時の純真さ、新鮮な体験を忘れないようにと、心がけております。

さてわたしの韓国での初めての体験を分かち合いましょう。韓国でシスター方は「○○(名前) + 수녀님(スニヨニム)」とよく呼ばれていたのです。私は수녀님이

シスターのことだと理解して、自己紹介の時「わたしは 自分の名前 + 수녀님(スニヨニム) です」と皆に紹介しました。ある種の戸惑いの空気を感じましたが、何が原因かはわかりませんでした。しばらく後で一緒に暮らしている姉妹から수녀님(スニヨニム)は直訳するとシスター「様」で普通私たちはカトリック수녀님(スニヨ)と紹介するのだと教えていただき、自分自身にためらいもなく「様」付けてしまっていたのが恥ずかしいやら可笑しい気分ではあったことがありました。穴があつたら入りたいたとはこのことですね。

韓国も日本同様、様々な敬語があり、場面に応じて使い分けられています。わたしもまだ勉強が始まったばかりですが、敬語には悩まされています。敬語がなければどんなに楽なのだと思います。それでも日本人として育った感覚からでしょうか、自分をちよつと脇において相手を尊重するというのは美しいですね。また、わたしの韓国人の韓国語の先生は、会社で部下と距離を取らないためにあえてため口を使うことがあるそうです。全く逆

の状況ですが、相手との関係を尊重して使う言葉を変える、ということとは謙遜なイエス様のようにどこまでも「相手」を大切にする姿を思い起こさせます。

敬語について日本にいた時にはあまり考えませんでした。改めてその美しさ、豊かさ、温かさを感じています。私たちの普段使う言葉が本来持っている温かさを表現できますように。韓国から祈りを込めて。それではまた。

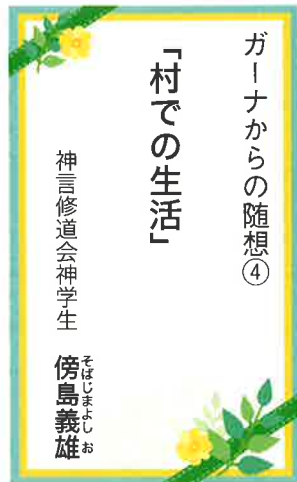


ガーナからの随想④

「村での生活」

神言修道会神学生

傍島義雄
をばしまよお



皆さん、こんにちは。私は昨年十一月四日から今年の二月三日にかけての三か月間、ある村での生活と司牧を体験させていただきました。今回は、その村での体験について皆さんと分かち合いたいと思います。

私が滞在したニャピエニャという村には、司祭たちが常駐するアスチュアリ小教区の巡回教会の一つがあります。私はその村の小さな家で、私より十歳若いホストマザーとその小学四年生の息子と一緒に暮らしました。と言つても、その



ホストマザーの母や弟妹家族が輪を描いた住居の並びの中で協力して生活していたので、実際には大きな家族の中で私は暮らしていたと言えるでしょう。私はこの村で、現地の言葉と文化を吸収しながら、日曜日やクリスマス、元日においては、「みことばの祭儀」もしくは「聖体祭儀」を執り行なっていました。

近年、ニャピエニャ村の近くにフランシス企業による巨大バナナ農場が開拓され、その農場のための働き人が数多く募集されておられ、そのための住居群が建設されつつあります。いずれこの村は大きな町や市に発展すると見込まれており、小さな旧聖堂のとなりに、大きな新聖堂が急ピッチで建設されています。一方で、ニャピエニャ村にはまだ電気や水道が通っておらず、他では得難い生活を垣間見ることができました。私自身もかなりの田舎出身ですが、さすがに電気や水道はある中で育ったので、この体験は貴重です。村にはいくつかの池や湿地帯があるのですが、流れている川が近くにありません。雨季には雨水を溜めて用いることができるのですが、乾季においてはきれいな

水を得ることが非常に難しくなります。多くの場合、私のためには他の町からオートバイで運んできた水道水を用意してくれたのですが、人々の普段の水浴び、洗濯、皿洗いのためには、池から運んできた濁った水が広く用いられていました。その水の運搬のために、人々は毎日多くの時間と労力を費やし、子どもたちも重要な働き手となります。

日曜日のための説教を準備する経験も貴重でしたが、それと同時に、人々とともに住み、水を汲みに行き、頭にバケツを載せながら羊や山羊、牛やハエがうごめく中を歩き、バケツ一杯の水で水浴びしたことも貴重な経験です。人々と一緒に唐辛子の収穫や選別を行なったことも貴重な経験です。おそらく暑さのために、体中に無数の発疹が現れたことも貴重な経験です。特に印象深かったのは、夜空に数多くの美しい星を見ることができたことです。電気や水道が当たり前のようにある環境に慣れてしまうと、見失っていることもあるのだらうと感じます。ふり返ってみると、本当に幸せな日々でした。

「第八回」十字架の重要性 (2)

十字架は、イエス・キリストが命を落

とされた場所や彼の救いの業を思い起こすキリスト教の主な象徴です。それゆえ、

十字架はキリスト教の信仰とキリスト自身

のしるしです。儀式のために十字架の

しるしを用いることは、状況によって、

祈り、献身と信仰宣言の敬虔な行為にな

ります。十字架は、福音書でも強調され、

ひどい屈辱と苦しみや、神の民の愛の激

しい苦痛についての、イエスだけではな

く、キリスト教徒の経験でもあります。

教会は、イエスのいけにえを思い出さ

と言います。

カトリックの信仰において、なぜ十字

架につけられたイエスが重要なのかにつ

いては、次の事柄が考えられます。

いけにえ――

カトリック信者は、「神は、その独り

子をお与えになった：(ヨハネ3章16

節)」ことに同意します。神の子イエス・

キリストは、世の罪を取り除くために御

自分の命を捧げられました。イエスは、

父である神のみ旨を果たすために、考え

の場所に飾られたものであれ、あるいは

ネットレスとして首にかけられたもので

あれ、必ずイエスの苦しみを思い出させ

ます。そのため、イエスの苦しみと死は、

敗北と考えるのではなく、むしろ、命の

勝利と考えなければなりません。

言質――

イエス・キリストはその十字架の上で

自分自身を、私たちのために自由かつ完

全に捧げられました。同様に、それぞれ

の召命について述べるなら、結婚の約束、

リスト信者たちは皆、十字架で亡くなられたイエスがおられなければ復活はないと信じています。カトリック信者たちも、イエスは復活されたと信じていますが、復活に先立ち、イエスが苦しみを耐えなければならなかったこと、すなわち、十字架でのイエスの過越しを思い出します。ですから十字架は、私たちが「贖いの神秘」をよりよく理解するために役立ち、感謝することができます。

愛

十字架を用いることは、些細なことでも、キリストの死に対する病的な先入観でもありません。十字架と共に、私たちは、拷問の兆しを通して、すべての人類の救いのしるしへと変化した、残酷な十字架にかけられたイエス・キリストが、私たち一人一人を、また、人類としてだけでなく愛しておられたかを思い出します。イエス・キリストのたいなる愛を見ないで、十字架を眺めることは出来ません。キリストが言われたように、「これ以上に大きな愛はない（ヨハネ15章13節）」

のです。イエスの十字架は二千年前に、全ての人々を救うための、永遠の愛のいにえを描写しています。そのため、十字架と共に行列したり、十字架を礼拝したりする時に、教会は、その十字架を単に見せるではなく、私たちへの神の愛を宣言しています。

典礼の伝統

カトリック教会の場合、十字架は、教会の典礼の伝統において特別な役割を果たしています。ほとんどの教会では、十字架に特別な誉れと地位が与えられ、通常、祭壇や聖櫃せいぐわの真上に置かれています。信者が教会の扉を通って入る時、十字架は最初に目に入るものの一つです。私たちの救い主の開かれた腕は、御自分の存在の中に私たちを喜んで迎え入れられます。

■事務室受付時間(通常)■

日曜日 9:00~18:00
火~土曜日 9:30~18:30

※定休日：月曜日・祝日

(上記受付時間、売店営業時間は変わる場合があります)

■売店営業時間(通常)■

火~日曜日 10:00~18:00

※定休日：月曜日・祝日

■ミサ時間案内(通常)■

主日：7時・9時(日曜学校)
10時30分・12時・18時
*第1日曜16時(英語)
*第3日曜16時(タガログ語)
平日：7時/金曜：7時・12時
土曜：7時・16時(主日のミサ)